

# 千刈狸の呟き

## ～ドーピングと義肢～

五輪狸

この夏「義足のレーム、五輪金メダリストを超えられるか」という新聞の見出しを見たとき、はじめその意味をつかめなかった。後でそれがパラリンピック選手つまり身体障害者が、五輪選手すなわち身体に障害のないトップアスリートの記録を破るかもしれないということだとわかった。

走り幅跳びでカーボンファイバーの義足をブーンとしならせて空中高くジャンプしているドイツのレームという選手の写真を見た。踏み込む足は健常足だとてっきり思っていたが、地面を蹴っていたのは義足のほうで、これにはなんとなく違和感があった。こんなことをしたら接合部への過大荷重で肉体は損傷し装具は破損するかもしれない、と思ったからだ。こういう危惧はもう時代遅れらしい。いまや競技のための装具は補助具ではなく頑丈な武器になっているのだ。しかし、そうだとすれば義足の性能によって記録は大きく左右され、その人の身体能力とは異なるところで勝負が決まる。考え方によっては、これは義肢によるドーピングにはならないのか。こんな思いがあったので、リオデジャネイロ五輪が閉会した翌日に新聞掲載された記録一覧を見てみた。そこで気づいたのは、パラリンピックについて自分があまりにも無知だということだった。

競技種目は公平さを保つために、視覚障害、脳性まひ、切断など、車いすなどをさらに障害の程度でもクラス分けしているのが多岐にわたっている。よく考えれば当然といえるが、その結果として、たとえば男子陸上の100m走は14の異なるクラスがエントリーされており、金メダリストが14人いたのには驚いた。しかもその成績は世界新記録2名、大会新記録5人、日本新記録1人と目を見張るものだった。ちなみに女子競泳50m自由形は金メダリスト10名で、世界新3、大会新4、日本新1だった。冒頭で述べた男子走り幅跳びでは、注目されたレーム選手は残念ながら五輪金メダリスト記録を超えられず大会新記録に終わったが、9名いた金メダリストの一人として面目を保った。この種目も世界新2、大会新5とハイレベルだった。

このように、今回のパラリンピックは記録ラッシュであった。その背景には最近の義肢など装具の飛躍的な性能向上があり、世界のレベルが上がったからだといわれている。日本の金メダルがゼロだった原因はその波に乗り遅れたためらしく、2020年東京オリンピックに向けて関係者はすでにその対策に着手しているという。

五輪開催地はパラリンピックも同時開催しなければならない、という取り決めが2000年になされ

て以降、身障者スポーツが盛んになるとともに競技志向が強くなり、プロ化も進んだ。この流れの中でスターも生まれているらしい。装具関連メーカーがこの現象に着目するのは当然だ。あるいは火をつけているのはメーカー側かもしれない。

車いすテニスで今季世界ランキング1位の選手(フランス)の車椅子はカーボン製で開発費も含め1500万円、一方日本選手のはオーダーメイドだが40万円程度だという。金持ち、西欧貴族、あるいは特別な才能の持ち主でないと勝てない時代になっていくのだろうか。

今回のリオ五輪はジカ熱、インフラ未整備、大統領弾劾による政情不安、ドーピングなど多くの課題を抱えてのスタートだった。競技以上にこれらへの関心が高かったように感じたが、特に目を引いたのはロシアのパラリンピック選手全員に出場禁止の措置が取られたことだった。国ぐるみでドーピングが横行したと判断されたからだ。薬物ドーピングは国威発揚、役人や監督の荣誉褒章、選手の勝たねばならぬプレッシャーなどを背景として組織的、個人的に行われてきた。いったん手を染めると麻薬のごとく止められず体も蝕まれる。発覚を防ぐ巧妙な隠ぺい工作は疲弊以外のなにもでもない。

今大会で顕著だった義肢の改良進歩による相次ぐ記録更新は、もしかすれば薬物ドーピングが無意味なことをその筋の国、役員、選手たちに気づかせたかもしれない。もしそうだとすれば、次にくるのはパラリンピック選手の義体改良合戦になるだろう。その場合、進歩する義体そのものが新たなドーピングとして問題にならないのか、という思いを拭い去ることができない。

このようなことを考えていたら、さらに先を行くニュースが飛び込んできた。サイバスロンという義体の最先端技術の競技が今年スイスで初めて開催された。一例をあげれば、義肢を骨、神経、筋肉に直接結合手術することで患肢にかかる圧力の強弱を微妙に感知することが可能になった人たちがいる。彼らが缶切りで缶を開けたり、ドアを操作するといった日常的な作業に取り組み、その優劣を争う競技だ。2020年東京オリンピック後に、7日間の日程でこのサイバスロン開催がすでに決まっているという。

かつて観たアーノルド・シュワルツェネッガー主演映画「ターミネーター」の世界が現実化するのもそう遠くないかもしれない。また一方で、技術進歩で身体能力を補助する義体能力が向上するなか、一切の機具や義体によらない「生身の人間の身体能力の価値」が再評価されてもいいと思う。